

組織程有難いものはない。そして、人を殺す為めの組織としての軍隊ほど恐ろしいものはないと、私は橋の上で涙を眼に滲ませ作ら考へたことであつた。

貧しい子供等が、木を見たいと云ふ。徳川水戸侯にお願して庭園を開放してもらつて、戸山軍楽隊の善い音楽を焼けた林の中で、江東の子供等に聞かせた。私は子供等の胸から早く痛ましい悲しみが去り、新しい光明が来る日を待つ。

私は本所から深川まで、江東全部を自分の仕事場と定めてゐる。

「私は焦土の上を、備碧の色で塗りたい」

さう私は自らに云つた。私等の芸術はたゞ画布の上の芸術だけであつてはならない。私等の芸術は、地球の上にぬり付ける生命芸術でなくてはならぬ。

私は被服廠跡で焼け死んだつもりで働かう。かうきめて、私は防寒運動に出て来た。

此の冬は幾千人か凍死するものが出て来よう。嬰兒は今のバラックで育ちさうにもない。上野にも、浅草にも、日比谷にも、丸の内にも、幾百人々がこの寒空に屋外に孤を着た儘寝てゐる。

この間も、うちの渡辺さんは、夜中に起き上り、自分の袴の古着を五、六枚持つて何も知らずに寝てゐる浅草の孤の無い哀れな無宿の人々の上にかけて廻つた。

私は涙ながらに渡辺さんを賞めて云つた。

「——それらの人々は眼が醒めた時に、衣服が何処から降つて来たのかと疑ふでせう。天の使は毎晩、現れるが善い……」

私達は今、それらの人々の為めに早くテントが与へられるやうに市にせがんでゐる。

天の使は地上に住んでゐる可き筈である。我等はそれ等の天の使の道をつける役になりたいものである。

(一九二三年一月一三 本所松倉町のバラックにて)

おゝ我等は狂ふ

私等は狂ふて居ます——おゝ神さま、それは、私等が地球が恐いからではありませぬ。また火事が恐ろしいからでもありません。私等には、愛なる神が何故わが同胞をかくは多数に奪ひ、猶ほその残れるものを饑餓と、寒気と、懊悩によりて苦しめ給ふかを疑ふ為めでありませぬ。

私等は、愛の為に狂ふてゐるのです。愛したい為めに狂ふてゐます。私等は恋人の如く、わが同胞を愛してゐます。その同胞を何故あなたはこんなに苦しめなさいませぬか？

恋人を奪はれたものは、みな狂ひます。そして、私等は、あなた、我等に与へ給うた恋人ならぬ恋人を持つて居ります。奪ひ去りなされる場合は、まだあきらめます。生かした儘苦しめなされるので、私等は堪えられないのです。

私に一人の恋人があります——それは日本です——花の乙女の日本です。誠に日本こそ我等の最も愛する恋人です。その日本をあなた、花のしとねの中より取り出して育て、富士と中禅寺湖と太平洋をもつて私等を飾り、桜とあやめを彼女の頭に結び、澄める秋の

空をもつて祝福なさいました。

そして——今あなたは 九月一日の大地震をもつて それを侮辱なされたのです。

彼女は漸く乙女になつたばかりでした。彼女は近頃 物心がつき始めました。自由と平和に憧れ初めたのは あなたも御承知の如く最近のことでありませぬ……

それが、まだ十分婚礼の準備も終らない中に あなたは 彼女をまた灰と糞壺の中に蹴込みなさいました。

お、彼女は今 灰の中に伏し倒れて居ります。彼女は暗衣を火に焼かれ 素裸の儘灰の中から起きて来ようとは致しませぬ。その美しき皮膚は焼き爛れ 癒えざる傷に大声をあげて泣き叫んで居ります。

その日に 火の旋風が 一張羅を落して 自ら慰めて居た彼女を襲ひました。彼女はひとたまりもなく そこに打倒れたのでした。彼女はその綺羅に燃え移つた火を消し止める工夫を知りませんでした。

それはあまりに突嗟(とっさ)のことでありました。火は裾に燃えうつり錦のやうに繡をした糸を伝うて花火線香のやうに拡がつて行きました。それは形容も出来ない美しい焰でありました。詩人はその絹の皮膚の上に燃え拡がつて行く紅の焰をこの上なき芸術だと云つて讚美いたしました。

然し……その日に 乙女なる日本は魂の底まで火傷を致しました。

脳底に地氈が起りました。地震は脳震盪と変化いたしました。

彼女には凡てのものが狂つて見えませんでした。

× × × × ×

労働者が反逆した。主義者が煽動した。迷信な教徒が放火した。刀も槍も狂ひました。石垣も 電柱も 針金も 囚人を繋ぐ鎖までが氣狂ひしたと感じたのでした。

唯その間に 氣を狂はさなかつたのは赤い血に渴いた死のみでありました。

× × × × ×

然し 死も 狂へる彼女——わが愛する日本を見て逃げ去りました。

私は 死が逃げ出した光景を 今あなたに報告いたします。

恰度それは 九月一日の夕ぐれ 火が被服廠跡を訪れた時でした 髪と云ふ髪は男のものであらうが 女のものであらうが 凡て焼けて了つた瞬間であります。

『死』は素足で 火焰の中から飛び出して 一目散に北の方に逃げて行きました。

その取り乱した態と云へば話にならない程であります。『死』も火焰の為に黒衣を焼き あばら骨をあらはに見せ 凹んだ眼窩と突き出た頬骨の間に苦味走つた恐怖を持つてゐました。

『死』も被服廠跡でした自らの悪戯を見て吃驚して逃げ出したやうであります。死はあまり火焰の中で戸惑うたと見えて 多くの白骨を落して行きました。それは彼が五体の何処かの部分を落したものを

と見えます。

『死』さへ 恐怖して逃げ出した阿鼻叫喚の巷には あはれや氣を
狂はせた多くの魂が火焰の下に捨てられてありました。

癒されない魂として 涙さへ蒸発して たゞ悩む為め灰の中にお
が恋人なる日本が捨てられてありました。

× × × × ×

神よ 私は恐れてゐます。日本は今氣が遠くなり 外部に対する
判別もつかなくなりました。黑白の区別も 喜悲の差も 善と悪の
区別も 殺戮と愛撫の境目も凡て見わたることが出来なくなつたと
云ふことを私は恐れてゐます。

× × × × ×

父よ 私は今 貧民窟の焼跡のテントの中に坐つて 五十日前の
悲劇を考へめぐらしてゐます。

願はくは 冬の来ぬ前に この凍えつゝある友を救ひ給へ。

私の魂は 今狂つて居ります。願はくはそれが冷静に帰する為め
に 我等を光明に導き給へ。

(東京本所横川町救護テントにて)

凡ては私の魂の裝飾

誤解さるゝとき

静かに 立ち

責めらるゝとき

勇敢に忍び

貧しけれども

多くの人を富まし

何も持たざる日に

凡てのものを持つ

悲しみ 悲しみたらず

苦しみ 苦しみたらず

生死を越え

祈の中に たゞ

帰りに行く

父のみ胸

槇の生垣よ

小川よ 池よ 農村よ

凡ては 私の魂の為めの

裝飾——

凡ては 私の魂の裝飾である。誰にも愛せられざる日に、自然と
神は私の味方になつて居てくれる。

眼を開けば 日輪が私の為に輝き 耳を傾けると 私の為めに

隣のピアノが鳴つてゐる。私は一人で淋しいことを少しも苦にしな
い。川も山も 海も 昆布も 礦物も 植物も凡て私を愛してくれ

る。私が彼等に興味を持たない時には 彼等は私に接近してくれな